

知っておきたい 黄連解毒湯の基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生 熊本赤十字病院 総合内科 部長／内分泌代謝科 部長

出典 外台秘要方

黄連解毒湯の出典は、『外台秘要方』（王燾 752年）である。

効能又は効果

比較的体力があり、のぼせがみで顔色赤く、いろいろな傾向のある次の諸症：鼻出血、高血圧、不眠症、ノイローゼ、胃炎、二日酔、血の道症、めまい、動悸、湿疹・皮膚炎、皮膚瘙癢症

古典に見る黄連解毒湯

外台秘要方（王燾 752年）

黄連解毒湯の出典は唐代の後期に王燾によって編纂された『外台秘要方』であり、ある種の感染症後の不養生によって引き起こされた熱によるせん妄や脳炎様の精神症状に対して用いられた処方であることが記されている。

また、『外台秘要方』巻一 傷寒門 崔氏方には、「感染症の最中に便秘をして腸管内に乾燥した便が貯まるためにうわ言を言っている場合や便秘せずに高熱でうわ言を言っている場合があり、前者には承気湯、後者には四物黄連除熱湯の服用がよい」という条文がある。承気湯は大承気湯、四物黄連除熱湯は黄連解毒湯と考えられる。

肘後備急方（葛洪 4世紀）

4世紀に葛洪が著したとされる『肘後備急方』に、黄連解毒湯と同じ生薬構成の方剤が記されている。『外台秘要方』の適応と同じく、感染症で数日時間が過ぎて高熱が出るとともに、せん妄または脳炎様の精神症状が現れているときに用いることが記されている。

葛洪は『傷寒論』の原文に近いものを見ていたと言われる人物であることから、黄連解毒湯も『傷寒論』にまでその由来が遡れる可能性が示唆される。

医方集解（汪昂 1682年）

黄連解毒湯の当初の適応は、急性感染症に伴う意識障害であったが、『医方集解』では「三焦の実火」を治療すると記されている。

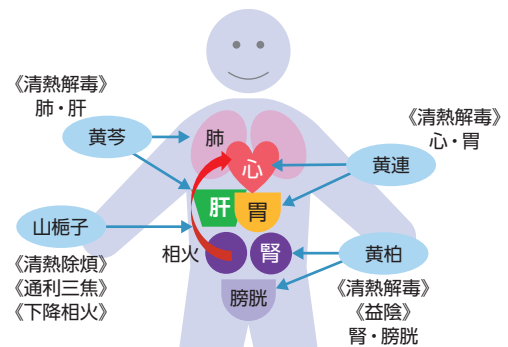
すなわち、黄連解毒湯は体の中で起こるすべての激しい熱症状の治療に用いられる方剤であり、熱に対する第一処方に位置付けられている。

黄連解毒湯の方剤解説（図1）

黄連解毒湯の構成生薬である黄連、黄芩、黄柏は清熱解毒の作用を有し、黄連は心・胃、黄芩は肺・肝、黄柏は腎・膀胱に働く。さらに三焦の熱を取り除き、下に降ろして尿から排泄させる働きを有する山梔子加わることで全身の隅々の熱を除く。そのため、黄連解毒湯の適応となる病態は、「瀰漫熱毒」「相火上騰」である。熱毒、すなわち全身に広がった、特に夜間に増悪しやすい発熱、発熱や暗い色の発赤、化膿性病変や粘液便、出血などを治療できる。また、体の中の熱エネルギーである相火が過剰・暴走すると腎から肝・胆をくぐって心まで昇と考えられているが、これを下に降ろして尿から排泄させることから、ホットフラッシュや不眠、胸苦しさ、動悸、煩躁などを治療できる。

図1 黄連解毒湯の方剤解説

- 瀰漫熱毒：夜間に増悪、発熱、暗い色の発赤、化膿性病変、粘液便、出血
- 相火上騰：ホットフラッシュ、不眠、胸苦しさ、動悸、煩躁



黄連解毒湯の類縁処方との鑑別

● 白虎加人参湯(図2)

白虎加人参湯が適応となる熱は「気分熱」である。気分熱は日中に増悪し、明るい色の発赤をきたすが、石膏・知母がその熱を取り、さらに人参は気を補うと同時に津液を補う作用を有することから「津液不足」も適応となる。つまり、日中に増悪する明るい色の発赤、乾燥または口渴がある皮膚や粘膜の発赤している病態、もしくは息苦しい、胸苦しい、顔が赤くなる、などの治療に用いる。

● 三黄瀉心湯(図2)

三黄瀉心湯は、組成・効果が黄連解毒湯に近似しているが、より心に強く影響する方剤と考えることができる。三黄瀉心湯の適応は「心火」であり、興奮、不眠、煩躁、動悸に有効である。また、「血熱妄行」という熱感とともに出血傾向が現れるものに効きやすい。

三黄瀉心湯は心の熱と血に結びついた熱を取り除く。つまり、血分の熱の特徴である興奮・不眠と夕方から夜にかけて増悪する熱感、鼻出血など頭頸部の出血に用いられる。さらに大黃が配合され、瀉下効果を有する。

● 十味敗毒湯(図2)

十味敗毒湯の適応は「瘡瘍未膿」「風湿犯表」であり、風湿邪が体表を犯しており、化膿性病変であればまだ膿瘍を形成していない状況に用いる。

十味敗毒湯は体を冷やす成分と体を温める成分が拮抗しているため、寒熱の偏りが少ないことが特徴である。湿疹性病変では淡い紅斑・丘疹・小水疱に用いるが、膿栓ができていたような状況には不向きである。また、化膿性皮膚疾患では、膿疱や癰に至っていない状況に用いる。

● 柴胡加竜骨牡蛎湯(図2)

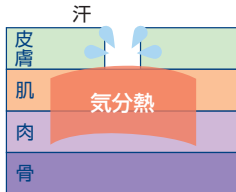
柴胡加竜骨牡蛎湯の適応は「肝火凌心」であり、肝の気滯が熱化したものが心に影響した状態に用いる方剤である。つまり、イライラや抑うつのような肝の気滯の症状が熱に変化することで生じた興奮性、陽性の情動反応と、不安になって情緒の不安定が生じ、イライラ、抑うつや、過覚醒、煩躁などの精神症状をきたしているときに用いる。

● 大柴胡湯(図2)

大柴胡湯の適応は「肝鬱化火」「肝胃不和」である。つまり、イライラ・抑うつなど肝の気滯の症状が熱に変わり激しい熱感、易怒、顔面紅潮とともに腹痛、便秘などの消化器症状を合併しているときに用いる。

図2 黄連解毒湯の類縁処方との鑑別

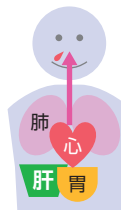
白虎加人参湯



気分熱：日中に増悪、明るい色の発赤
津液不足：乾燥

- 気分熱・発汗により津液の不足があり。
- つまり、日中に増悪または明るい色の発赤、乾燥または口渴あり。

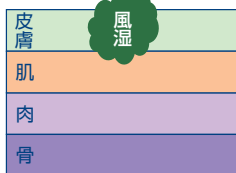
三黄瀉心湯



心火：興奮、不眠、煩躁、動悸
血熱妄行：熱感・出血

- 心の熱と、血に結びついた熱。
- つまり、興奮・不眠と、夕方から夜にかけて増悪する熱感、鼻出血などの出血。
- 大黃が配合されており、瀉下効果がある。

十味敗毒湯



瘡瘍未膿：化膿性疾患の初期
風湿犯表：体表の痒み・突然の症状、浮腫

- 風湿邪が体表を犯しており、瘡瘍であれば、まだ膿は形成していない。
- つまり、寒熱の偏りが少ない蕁麻疹。
- 湿疹性病変では、淡い紅斑・丘疹・小水疱。
- 化膿性皮膚疾患では、膿疱や癰に至っていない。

柴胡加竜骨牡蛎湯



肝火凌心：鬱結した肝気が熱に変化し、心に影響

- 肝の気滯が熱化したものが、心に影響している状態。
- つまり、イライラや抑うつから生じた興奮性、陽性の情動反応と、不安や情緒の不安定性が生じている。

大柴胡湯



肝鬱化火：肝の気滯が熱に変化
肝胃不和：肝の気滯が消化管に影響

- 肝鬱化火、肝胃不和に対して疏肝解鬱、清熱瀉下する。
- つまり、イライラ・抑うつなどから、激しい熱感、易怒、顔面紅潮、腹痛、便秘が生じる。

知っておきたい黄連解毒湯の基本と臨床のポイント

現代医療における黄連解毒湯の臨床応用

● 症例1 52歳 女性、主訴：ホットフラッシュ(図3)

肝鬱化火、肝血虚、血瘀の弁証にて加味逍遙散を処方したところ、服用2週間でイライラや下肢の攣りは減り、ホットフラッシュも頻度は低下したが、1回/日のホットフラッシュと発汗があった。瀉火を強めるために黄連解毒湯を頓用したところ、症状は消失した。

● 症例2 15歳 男性、主訴：顔の紅潮(図4)

ワーファリン内服中のため、漢方治療を先行させた症例である。熱毒熾盛の弁証にて黄連解毒湯を処方したところ、2週間後には顔面の紅斑様の局面は改善した。その後は消風散に変更し、加療を継続している。本症例のように暗い赤みの紅斑様の病変で、局面上は真っ赤になっているようなときに黄連解毒湯は良い適応である。

● 症例3 29歳 女性、主訴：右手の腫脹・疼痛(図5)

上肢の蜂巣炎の診断で、アトピー性皮膚炎の部分からの

細菌感染によって蜂巣炎を発症したと考えられた。明るい発赤の部分は気分熱だが、化膿性病変は熱毒を示唆する所見であることから気血両燔と弁証した。越婢加朮湯、黄連解毒湯と内服抗菌薬による治療で症状は速やかに消失した。

図3 症例1 52歳 女性

【主 訴】 ホットフラッシュ

【現病歴】 約2年前から月経が不規則になってきた。約1年前から、倦怠感、顔のほてり、気分のイラつきが出現するようになり、症状が増悪傾向のため受診した。

【現症・漢方的所見】

- 些細なことでイライラしやすくなる。イライラしたり興奮すると顔が熱くなり発赤し、同時に発汗する。下肢が攣りやすくなり、爪も割れやすくなった。入眠に時間がかかるようになった。
- 脈診：脈弦、やや細、やや数。
- 舌診：舌尖紅、舌苔薄白、舌下静脈やや細。
- 腹診：腹力3/5、左胸脇苦満軽度あり、左臍傍圧痛あり。

【弁 証】 肝鬱化火、肝血虚、血瘀

【処方・経過】 加味逍遙散の内服2週間で症状は軽減したが、さらに瀉火を強めるために黄連解毒湯を頓用したところ、症状は消失した。

図4 症例2 15歳 男性

【主 訴】 顔の紅潮

【現病歴】 先天性の弁膜症で弁置換術を受けており、ワーファリンを内服中である。12歳頃から尋常性痤瘡を発症し、外用抗菌薬・荊芥連翹湯で加療するも、1ヵ月前から症状増悪のため受診した。

【現症・漢方的所見】

- 顔は熱を持ったように感じる。
- 顔面は、両側頬、前額部、顎部に尋常性痤瘡が集簇し、暗い赤みの紅斑様になっている。
- 脈診：滑有力。
- 舌診：舌質紅、舌苔やや黄色の苔あり。

【弁 証】 熱毒熾盛

【処方・経過】 黄連解毒湯の内服2週間で顔面の紅斑様の局面は改善した。その後は消風散に変更して加療を継続している。

図5 症例3 29歳 女性

【主 訴】 右手の腫脹・疼痛

【現病歴】 来院3日前に右手背部の腫脹・疼痛が出現、38℃台の発熱がある。来院前日に近医を受診し、全身疾患も含め精査・加療目的で当科を紹介受診した。

【既往歴】 アトピー性皮膚炎

【現症・漢方的所見】

- 明るい発赤 → 気分熱
- 化膿性病変 → 熱毒

【弁 証】 気血両燔

【処方・経過】 越婢加朮湯・黄連解毒湯・セファクロルの内服で症状は速やかに消失した。

初診時



2日後



5日後



図6 症例4 36歳 女性

【主 訴】 不眠

【現病歴】 全身性エリテマトーデス(19歳発症)であり、皮膚症状のみでヒドロキシクロロキン硫酸塩内服と対症療法で経過観察していた。出産後(1年前)より、タンパク尿・血尿が出現し、腎生検でループス腎炎ClassⅢ(A)と診断され、ステロイドパルス療法および大量ステロイド投与となった。ステロイドパルス療法の初日から不眠となり、レンボレキサントとクエチアピンフマル酸塩の内服でも眠れないと訴えていた。

【現症・漢方的所見】

- 目がさえて眠れない。イライラはしない。体は熱く感じる。やや動悸がある。
- 脈診：滑有力、やや数。
- 舌診：舌尖紅、薄白苔。

【弁 証】 心火亢盛

【処方・経過】 黄連解毒湯(2回服用分、眠前)の内服後より入眠できるようになった。

● 症例4 36歳 女性、主訴：不眠(図6)

ループス腎炎ClassⅢ(A)の診断でステロイドパルス療法および大量ステロイド投与となったが、治療の初日から不眠となり、西洋医学的治療でも改善しなかった。心火亢盛と弁証し、黄連解毒湯(2回服用分、眠前)を処方したところ、内服後より入眠できるようになった。

● 症例5 36歳 男性、主訴：動悸(図7)

現症及び漢方的所見から肝火凌心、胆気不斂と弁証し、柴胡加竜骨牡蛎湯と酸棗仁湯の併用で治療を開始した。内服開始から症状は改善傾向となったが、熱感と動悸が持続していた。心火の成分も強いと考えて黄連解毒湯を適宜使用し、症状は改善した。

● 症例6 28歳 女性、主訴：下痢(図8)

熱痢の弁証で黄連解毒湯と芍薬甘草湯を処方し、内服開始数時間後から症状が改善傾向となった症例である。漢方で

は水様下痢の「泄瀉」としぶり腹を伴う「痢疾」に分けて考えるが、本症例は熱の性質を伴う痢疾と捉えて熱痢と考えた。

黄連解毒湯の諸症状への活用

黄連解毒湯の諸症状への活用について図9に示す。

黄連解毒湯の要点 (図10)

黄連解毒湯は、「瀰漫熱毒」と「相火上騰」という2つの病態に大きなポイントがある。

瀰漫熱毒は、夜間に増悪、発熱する病態で、暗い色の発赤の紅斑や局面、化膿性病変、粘液便、出血などの病態を指す。さらに、体の中の熱エネルギーが下から上に突き上げてくる状況である相火上騰に伴って起こるホットフラッシュ、不眠、胸苦しさ、動悸、煩躁に用いる。

類縁処方との鑑別点について、明るい発赤、日中の発熱などを表す気分熱に対しては白虎加人参湯、淡い紅斑・丘疹・小水疱といった皮膚疾患での湿疹様病変に対しては十味敗毒湯、イライラ・焦燥・過覚醒といった精神症状に対しては柴胡加竜骨牡蛎湯、イライラ・抑うつ・熱感とともに腹痛・便秘がある場合は大柴胡湯、黄連解毒湯の症状に便秘を伴う場合には三黄瀉心湯、咽頭部などの痞え感、腹部膨満、ややイライラするような症状には半夏厚朴湯などが適応となる。

図7 症例5 36歳 男性

【主 訴】 動悸

【現病歴】 大地震の後から、些細なことでも大きく揺れるのではないかという不安感が出現した。約半年の経過で、職場の環境が変わり、イライラと焦燥感、顔がほてる感じが出現し、動悸・不眠も感じるようになった。

【現症・漢方的所見】

● イライラや焦燥感が強く、同時に動悸も生じ、ひどい時には顔のほてりと赤みが生じる。ため息も多い、入眠困難あり、悪夢を見ると中途覚醒もある、不安感も強く、焦燥感に似たものと、落ち着かないものが混じり、特に疲れると増悪する。

● 脈診：脈弦、滑有力。

● 舌診：舌質紅、黄色苔。

● 腹診：胸脇苦満、心下痞硬、腹直筋緊張。

【弁 証】 肝火凌心、胆気不斂

【処方・経過】 柴胡加竜骨牡蛎湯・酸棗仁湯で治療を開始し、症状は改善傾向だが、熱感と動悸が継続した。心火の成分も強いと考え、黄連解毒湯の適宜使用で症状は改善した。

図9 黄連解毒湯の諸症状への活用

- 更年期障害、月経前症候群(PMS)に伴うのぼせ、ホットフラッシュ、イライラ。
- 不眠症(入眠困難、中途覚醒)。
- 神経症(イライラ、不安、不眠、動悸)。
- 湿疹・皮膚炎(アトピー性皮膚炎、脂漏性皮膚炎など)。
- 皮膚痒痒症。
- 高血圧(のぼせ・ほてり、イライラ、不眠)。

図8 症例6 28歳 女性

【主 訴】 下痢

【現病歴】 5日前より腹痛、下痢が出現し、3日前に近医でニューキノロン系抗菌薬を処方されたが、症状増悪傾向のため受診した。

【現症・漢方的所見】

● 腹部の差し込むような痛みと、水様～粘液様の下痢が数十分ごとに来る。37℃台の発熱はあるが、悪寒はない。嘔気はない。腹部に灼熱感あり。

● 脈診：沈滑有力。

● 舌診：紅、黄色苔。

● 腹診：腹部全体に圧痛あり。腹直筋やや緊張。

【弁 証】 熱痢

【処方・経過】 芍薬甘草湯・黄連解毒湯の内服数時間後から下痢・腹痛は改善傾向となり、2日後には1回/日程度となった。

図10 黄連解毒湯の要点

- 瀰漫熱毒：夜間に増悪、発熱、暗い色の発赤(の紅斑・局面)、化膿性病変、粘液便、出血。
- 相火上騰：ホットフラッシュ、不眠、胸苦しさ、動悸、煩躁。

《類縁処方との鑑別》

- 白虎加人参湯：明るい発赤(気分熱)。
- 十味敗毒湯：淡い紅斑・丘疹・小水疱。
- 柴胡加竜骨牡蛎湯：イライラ・焦燥・過覚醒(肝火凌心)。
- 大柴胡湯：イライラ・抑うつ・熱感、腹痛・便秘。
- 三黄瀉心湯：黄連解毒湯の症状+便秘。
- 半夏厚朴湯：咽頭部などの痞え感、腹部膨満、ややイライラ。